

令和3年度 病害虫発生予察 特殊報 第2号

病害虫名： ツマジロクサヨトウ *Spodoptera frugiperda* (J.E.Smith)

対 象： 飼料用トウモロコシ

1. 病害虫情報の内容

ツマジロクサヨトウの発生と被害を、東京都多摩地域において確認した。

2. 発生経過

- 令和3年9月に東京都多摩地域において、ツマジロクサヨトウ擬似幼虫による食害を確認した（図1）。採取した擬似幼虫（図2）の同定を横浜植物防疫所に依頼した結果、ツマジロクサヨトウ（*Spodoptera frugiperda*）と確認された。
- 本種は北米～南米、アフリカ（サハラ以南）、アジア（インド、中国、タイ、ミャンマー、台湾）等に分布する。国内では、令和元年7月に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初めて確認された後、他の作物を含め全国46道府県で確認され、各道府県で特殊報が発表されている。

3. 形態

終齢幼虫は体長約40mmで、頭部の逆Y字が淡色で、尾部の刺毛基盤（黒色斑点）が隆起しているのが特徴である（図3）。

成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅中央部に白斑を持つ（図4）。

4. 生態

本種は暖地に適応した種（南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産）であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することができないとされている。一晩で最大100km移動するなど、長距離飛翔することが知られている。

5. 被害

幼虫が植物の茎、葉、花並びに果実を食害する。摂取量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

ふ化後間もない幼虫は、卵塊が産み付けられた植物を食害するが、成長した幼虫は分散するため、被害はほ場内で筋状またはスポット状に広がる。

寄主植物はトウモロコシやイネ等のイネ科植物のほか、アブラナ科、ナス科、ウリ科等、幅広い作物に寄生する。国内では飼料用トウモロコシが主であるが、サトウキビ、スイートコーン、ソルガム等のイネ科作物やショウガでも発生が確認されている。

6. 防除対策

- (1) 多発すると被害が拡大するおそれがあることから、ほ場を良く見回り、幼虫の早期発見に努める。
- (2) 発生を認めたら、ツマジロクサヨトウに登録のある薬剤により、発生初期の防除を徹底する。
薬剤散布が困難な場合は、被害作物を早期に刈り取りし、サイレージ処理を実施する。
- (3) 幼虫及び土中のさなぎを駆除するため、収穫後は直ちに耕うんする（複数回が望ましい）。
- (4) 農薬の使用に当たっては、散布は無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向き、防除器具のノズルの向き等に十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して、散布予定農薬の種類や散布時期を事前連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に留意する。
- (5) 不明な点があれば病虫害防除所や普及センターに連絡する。

7. 参考文献

農林水産省「ツマジロクサヨトウ」防除マニュアル本編（第2版）

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/attach/pdf/tumajiro-150.pdf



図1 被害ほ場の様子(飼料用トウモロコシ)



図2 捕獲した幼虫



図3 ツマジロクサヨトウ終齢幼虫(左:頭部 右:尾部)



図4 ツマジロクサヨトウ成虫(左:雄 右:雌) 原図:農林水産省植物防疫所

表1 飼料用とうもろこしに登録のある主な薬剤(令和3年9月10日現在)

薬剤名 (成分名)	使用 方法	使用時期	散布液量	希釈倍率	本剤の 使用回数
ジャックポット顆粒水和剤 チューレックス顆粒水和剤 デルフィン顆粒水和剤 (BT)	散布	発生初期 ただし 収穫前日まで	100~300L/10a	500倍	—
パダン SG 水溶剤 (カルタップ)	散布	収穫 21 日前まで	100~300L/10a	1000~1500倍	2回以内